

古事記から学ぶ その 17
倭建命(やまとたけるのみこと)が登場

<1> 小碓命(をうすのみこと)の西への旅

ある日景行天皇が、我が子小碓命(をうすのみこと)を呼んで尋ねた。

「兄の大碓命(おおうすのみこと)が朝食の席に出てこない。朝食は皆でそろって一緒にするものなので、必ず出てくるようにと言ってくれないか」

前篇(古事記に学ぶ その 16)に示したように、景行天皇と息子大碓命とは良い関係にはなかった。

五日たっても一向に動きがないので、天皇はかなり気分を悪くして、小碓命に再びこう言った。

「兄は相変わらず朝食の席に姿を見せぬが、お前は兄にちゃんと伝えたのか」と経緯を聞くと・・・。

「朝早く、兄が厠に入った時を見計らって捕まえ、手も足も掴み取ってバラバラにして、菰にくるんで裏山に投げ捨てておきましたよ。」

見かけは優しくな少年である御子が、ここまでのことをするのかと驚くとともに行く末を心配した。

天皇は、小碓命に課題を与えた。

「西の熊曾(くまそ)の國に、朝廷の意向に従わない●熊曾建(くまそたける)が二人いる。(＊註①)

征伐して来てくれ」 ＊註①:熊曾建は兄弟で、熊曾兄建(えたける)と熊曾弟建(おとたける)

命令を受けた小碓命は、まだ15.6歳の少年だったらしい。叔母である倭比売命(やまとひめのみこと)から身につけていた衣裳を譲り受けて、短剣を懷に忍ばせて西に向かった。

彼の地に着いてみると、熊曾は家の周りを軍隊が三重に囲み、新しい室(むろ)を造営中だった。

周辺にいる人たちから得た情報によると、新しい室が出来たら盛大に新室楽(にいむろうたげ)が開かれるとのことで、人々は宴の準備でおおわらわの状況だった。

やがて宴の日になると、小碓命は髪型を少女風に結いなおして、叔母から貰って来た着物に着替えて少女の姿に化けて宴の場に紛れ込んだ。

熊曾建の兄弟は、見慣れぬ美しい少女がいるのを見つけて呼び寄せ、二人の間に座らせ、ともに歌って騒いで楽しんだ。宴もたけなわの頃合いを見て、小碓命は懷から短剣を出して、左手で熊曾兄の襟首をつかみ、短剣を胸に突き刺した。熊曾弟はこれを見て逃げ出したのだが、室の階段のところで着物の背をつかんで、短剣で尻から襲い掛かった。

熊曾が喘ぎながら、「あなたはどこの誰か?」と聞くので、

「私は纏向(まきむく)の日代(ひしろ)の宮に居てこの大八島の國を治めている大帯日子淤斯呂和氣(おおたらしひこおしろわけ)天皇の御子で倭男具那命(やまとをくなのみこと)だ。天皇からの命令で、朝廷に逆らう者の征伐に来た。」と名乗った。これを聞いて熊曾建は、

「仰せの通り、これより西には我々より猛々しい者はいません。大大和(おおやまと)の國に私たち二人より勇ましい方がおいでとは思いませんでした。私からあなたに名前を献じます。倭建御子(やまとたけるのみこ)として称えたいと思います。」

熊曾建の言葉が終わるや否や、小碓命は懷剣で瓜を割くように熊曾を切り殺してしまった。

そして、この時から倭建命(やまとたけるのみこと)と名乗るようになった。

そして都へ戻る道すがら、山や川に潜む荒ぶる神たちを平定し、吉備の國の海峡に巢食う●穴戸神(あなどのかみ)も平定した。

途中で出雲の國を通過する時、この地にいる荒ぶる●出雲建(いづもたける)を討伐しようと計略を

練った。偽って親友の誓いを立てて接近し、赤檣（いちい）の木で偽物の剣を作って、一緒に肥河（ひのかわ）で水浴をした。倭建命は自分が先に河から上がって、出雲建の剣を身につけてしまい、「お互いの剣を取り換えっこしよう」と言った。あとから上がった出雲建は、そこに置いてあった剣を偽物とは知らずに着用した。

そこへ倭建命は、「どうだ、ひとつ手合わせをしてみようではないか」

出雲建は剣を抜こうとしたが偽物なので抜くことができない。そこへ切り込んだ倭建命に殺されてしまった。こうして、朝廷に服さぬ者どもを征伐して、都に帰り天皇に報告をした。

<2> 倭建命 次は東の國への旅

旅の疲れも癒えぬ倭建命に、天皇は次の命令を下した。

「東国十二國にいる、朝廷に服さない者どもを平定して来い」

吉備の臣などの祖先●御鉏友耳建日子（みすきともみみたけひこ）が随行メンバーとして選ばれた。

そして、柊で作った長い木矛「比比羅木之八尋矛（ひいらぎのやひろぼこ）」を賜った。

まずは伊勢に向かい、大神宮に詣でた。

参拝の後、叔母であり、この伊勢神宮の斎宮（いつきのみや）として奉仕している倭比売命に会って自らの心情を吐露した。「天皇は、私に西國討伐を命じ、これを済ませて大和に戻るや、今度は東國十二か国討伐を命じてきた。父は私に早く死ねばいいと思っているのではないだろうか」

倭比売命は、黙って聞いていただけて何も言わず、出立のはなむけに草那芸剣（くさなぎのつるぎ）と袋を御子に手渡し、「もしも急に危ないことが起きたら、この袋の口を開けてごらんなさい」と添えた。

東の國へ向かい、尾張の国造の祖先である●美夜受比売（みやすひめ）の家に泊った。

この比売を妻としたいと思ったのだが、前途に苦難が待ち受けている状況なので、一難解決の後にしようと考え、比売との約束だけに留めて、旅を急いだ。

相武（さがむ）の國に着いた時、倭建命を快く思っていないこの國の国造が

「この野原に大きな沼があります。この沼に住む神は乱暴な恐ろしい神です。」と言って、命を誘い出した。命はその神を見ようと思って野原に入って行った。そこを狙って国造が野原の草に火をつけた。たちまち炎に囲まれてしまったが、叔母から持たされた袋を思い出して開いて見ると、火打石が出てきた。腰の剣で草を刈りはらい、火打石で火をつけて、取り囲まれた炎をしのぐ火勢で巻き返し、国造一味を切り滅ぼした。このことから、この地に焼遣（やきづ）の名がついた。

<閑話休題>

古事記本文ではこの出来事の場所を「相武の國」としているが、一方では「焼遣はどこか？」という次なる疑問が出てくる。「焼遣（やきづ）」は現在の焼津であるとし、「草那芸剣（くさなぎのつるぎ）」は現在の草薙（静岡市）であるとする見解と、舞台を「相武の國」であるとするところに矛盾があるように感じるが……。

さらに東征を続けて、東の淡の水門（あずまのあわのみなど）に向かうべく走水の海を渡った。

現在の地図で言えば、三浦半島の走水海岸から船で安房に渡ったということである。

この海峡を渡る時、この海峡に棲む神が荒波を起こして、渡航は困難を極めた。

この状況を見て、後の●弟橘比売命（おとたちばなひめのみこと）はこう言った。

「これは海の神の祟り、私が海に入って神を鎮めてまいります。あなたは、託された任務を果たして都に戻って、良い報告をして下さい」

そして、菅の畳を八枚・皮の畳を八枚・絹の畳を八枚、波の上に敷いて、「さねさして相武の小野に燃ゆる火の 火中に立ちて問いし君かも」と歌って波間に沈んでいった。

七日ほどのち、弟橘比売命の櫛が海岸に打ち上げられた。この形見の櫛を陵に入れた。

<閑話休題>

ここでは、炎に囲まれて相武の国造と戦った場所が「相武の小野」と歌われているが、「小野」は地名ではなく「小さな野原」を意味する言葉という解釈が一般的らしい。この出来事の場所は特定できていないらしい。

倭建命はなおも東征を続けて、蝦夷（えみし）を平定して、山や川による荒々しい神をことごとく平定して、都への帰途に就いた。途中で足柄の険しい坂の麓にさしかかって、干飯（ほしいい）を食べている時、この地の坂の神が白い鹿になって現れた。命は、食べ残した山蒜（のびる）の片端を取って投げつけた所、鹿の目にあたって殺してしまった。

険しい坂を上って頂に立つと、後の弟橘比売を思い出して三度深いため息を漏らし、

「あづまはや（ああ、我が妻は・・・）」と嘆いた。それゆえ、この地を「阿豆麻」と言う。

この國を越えて甲斐に出て、酒折に宮殿を建てて泊まった時に、こんな歌を歌った。

「新治 筑波を過ぎて、幾夜か寝つる」

蝦夷を征伐した後、新治・筑波の山を越えて吾妻に入り、甲斐へ抜けるコースを辿ったことがわかる。

「酒折に建てた宮殿」は、甲府の東側にある現在の酒折宮（さかおりのみや）だと言われている。

この時、命の傍にいて篝火を焚いて警護にあたっていた老人が、命の歌に続けて、歌った（返歌）。

「日日並べ（かがなべ）て 夜には九夜（このや） 日には十日（とうか）を」

命はこの老人を褒めて、東国の国造に任命した。

甲斐から科野へ、美濃の国の伊那へと越える科野の坂に住む神を平定して、木曾川を伝って尾張の國へと戻った。そして、往路で約束を交わした美夜受比売（みやすひめ）の元に辿り着いた。

旅の疲れを癒す美夜受比売のもてなしを受け、一夜を共にし、草那芸剣を美夜受比売の元に預けて、伊服岐の山（現在の伊吹山）に住む神を討つために、再び旅立った。

以上

登場人物の整理として、景行天皇とその子である成務天皇及び倭建命の関係を数にまとめて見た。

